

新聞を教科等の学習を深めていくための資料としてどう活用していくか

実践校第1年次 長野市立吉田小学校 代表 豊田義幸

I. 本校のNIEの現状

本校は全校児童809名、各学年4学級の大規模な学校である。来年度（平成21年度）は、NIE全国大会長野大会の発表校として、公開授業が行われることになっている。今年は、その前年度研究として教科学習の中で新聞を取り入れた授業を行った。

本校では、この指定を受けるまでは、特に「NIE」を意識しての活動は行ってはこなかった。したがって、「NIE」という事業を知らなかったり、聞いたことはあるが、どんな活動をしているのかわからないという職員が多かった。ただ、これまで何らかの形で、新聞を扱ったことのある職員は多く、その活用の良さを実感しつつも問題点を指摘する声も多く聞かれた。

そこで本年度は、とにかくまず、実践を積み上げ、検証してみることを第一とした。ただ、実践をする上で大事にしたかったことは、まず「新聞ありき」ではなく、まず、教科の学習のねらいを大事にしていくという点である。その中で新聞という素材の価値について研究を深めていきたいという立場で進めてきた。

II. NIEで高めたい力

本年度、全校研究テーマ「課題を持ち、ひびきあい、追究していく子ども」をもとに研究を深めてきた。この研究の立場に立ち、NIE活動を通して高めたい力は、主に以下の点である。

1. 広い視野に立って考える力

記事について自分の思いや考えを伝え合い深め合う中で、コミュニケーション能力を高める。そして、より広い視野に立って考える力を身につける。

2. 自分の思いや考えをすすんで表現する力

記事から読み取ったことを発表したり、話し合ったりすること。新聞を作って発信すること等を通して、文章力・表現力・読解力を身につける。

III. 研究の概要

1. 実践教科

本校では、NIE全校大会前年度研究として「国語科」「社会科」において、教科のねらいを大事にしながら新聞活用のあり方について研究を深めてきた。

2. 新聞提供状況

新聞については9月から12月の4ヶ月間。信濃毎日新聞・長野日報・朝日新聞・産経新聞日本経済新聞・毎日新聞・読売新聞の7紙の新聞を配達して頂いた。わたり廊下に長机を出し、全校児童の目に触れるようにした。

IV. 具体的実践の紹介

1. N I E 国語科研究

(1) はじめに

国語科前年度研究では、研究テーマを『伝え合う中で言葉を見つめ、言葉を豊かに味わう子ども』と据え、子どもたちが伝え合いの中で言葉の意味を深めていく姿をつぶさに見つめていきたいと考えた。

言葉は、その言葉を取りまく状況や、登場人物同士の関係、自分と相手との関係、作者の意図など、様々な要素によって多様な意味を持つ様に構成されている。子どもたちは、友の発する言葉の背後にあるそのような意味を瞬時に判断し構成しなおすことで、会話をしていると思われる。

こうした児童研究の中で、

- ①子どもの疑問や発言、小さな気づきから課題となるものを見つけて問い返していくことで、主体的な活動につながる。
→個々の子どもの願いや素朴な疑問から生まれる学習課題
- ②子どもが納得しているものをさらに問い返していくことによって、より深く言葉の意味を理解していくことにつながる。
→課題の本質に迫るための、教師からの揺さぶりの発問・効果的な板書・資料提示
- ③友との関わりの中で個々の追究が深まっていく。
→友との関わりをうむ学習形態・場面設定

という手だてを導き出した。

(2) 実践

①単元名 「へんとつくり」(3年)

②単元展開

	学習活動	指導(○)・評価(☆)	児童の意識(◎次時へのつながり)	備考	時間
導入	漢字の組み合わせゲーム① を楽しんだ後、既習の漢字で左右2つの部分からなるものを発表し合う。	○2人組で組み合わせゲームをさせ、楽しみながら左右に分けられる漢字について興味を持てるようにする。 ○左右2つの部分からなる漢字を発表させる。 ○左右に分けられる漢字の左側を「へん」、右側を「つくり」と呼ぶことを伝える。 ☆組み合わせゲームを楽しみ、左右2つの部分に分けられる漢字があることに気づくことができたか、ゲーム中の様子	・「合体漢字だ!」面白そう。 ・教科書で確かめながらやりたい。 ・左右に分けられる漢字って、いっぱいあるよ。 ・いっぱい見つけて、発表したい。 ・だから、「きへん」「にんべん」って言うんだね。 ◎オリジナル問題を作りたい。	・カードは「へん」だけ色つきにしておく。	1

		や発言から見る。			
展 開	組み合わせゲーム②(オリジナル問題)を作ったり, 友達の作った問題に取り組んだりする。	○4人組で問題を作らせる。(へんとつくりに分けてカードを作っていく) ○隣接する班の問題に取り組む。(できた漢字をワークシートに書く。読み仮名も) ☆友だちと協力し合いながら漢字を探し, 問題作りができたか、別の班のつくった問題の組み合わせを楽しんで取り組むことができたか、授業の様子から見る。	・教科書, ドリルを見て探すだろう。(「先生~, 今まで習った漢字だけ?」) ・どんな問題だったら悩むかな。 ・同じへんの漢字をいくつか入れちゃおうか。 ◎同じへんの漢字って, 結構たくさんあるね。	・ゲーム用のカードを用意する。	1
	オリジナル問題を全体で見合った後, 教科書・ドリルから「さんずい」のつく漢字をさがし出す。	○各班で作られた問題を全体に広める。 ○二人組で, 教科書・ドリルから「さんずい」のつく漢字をさがして, 学習カードに書かせる。 ☆「さんずい」のつく漢字をさがし出すことができたか, 学習カードから見る。	・「さんずい」「きへん」「にんべん」って多いね。 ・「さんずい」って今まで何個習ったんだろう。 ◎まだ習っていない漢字も見つけてみたいな。 ◎「さんずい」にはどんな共通点があるのかな。	・学習カードを用意する。	1
	「さんずい」の意味について考え, その考えが未習の漢字でも言えそうか新聞を使って確かめ合う。	○前時見つけた「さんずい」のつく漢字を出し合い, 「さんずい」が水に関係するという気づきを取り上げ発表させる。 ○「さんずい」について考え合わせる。 ○新聞から「さんずい」のつく漢字を探させ, 水との関わり合いを考え合わせる。 ☆「さんずい」のつく漢字は水に関係するものが多そうだ, ということに気づくことができたか, 発言や表情から見る。	・「さんずい」は, 水に係していそうだよ。 ・「湯」は水に係しているけれど, 「決」は係しているかわからないよ。 ・もっとたくさんさがしたい。 ・新聞にもこんなに「さんずい」のつく漢字が載ってて面白いね。 ・「汗」は水に係しているよ。	・新聞はフリガナについている子ども新聞から記事をさがしておく。	1
発 展	組み合わせゲーム③をして, 「つくり」の共	○共通するつくりをもつ漢字の組み合わせゲームをさせる。 ○既習の漢字の中から共通する	・右側が同じ部分の漢字の仲間もあるよね。 ・「つくり」が同じ漢字, 他	組み合わせゲームを用意す	1

通する漢字もあることを見つける。	つくりの漢字をさがさせる。 ☆へんだけでなく、つくりが共通する漢字もあることを知り、漢字のでき方に興味をもつことができる。	にもあったよね。 ・「都」と「部」。「味」と「妹」。	る。	
------------------	--	-------------------------------	----	--

(3) N I E とのつながり

本校が国語科で追求していきたい、子どもたちが伝え合いの中で言葉の意味を深めていく姿について考えたとき、新聞の持つ言葉としての資料性は大変有効な手だてとなりうると考えられる。

つまり、

課題の本質に迫るための、教師からの揺さぶりの発問・効果的な板書・資料提示。

- ・表面的な理解から、もう一步深めた理解へと子どもを導く発問の工夫。
- ・子どもの経験や身近な事物に向き合わせることで、知識・理解の広がり

の部分での新聞の活用の可能性である。

新聞は、言葉の集合媒体としてみると、子どもたちにとって大変身近な存在であると言える。また、内容について見てみると、今回の授業のように記事の内容から、知らない漢字の意味や、言葉の意味を推測していくことも容易であると言える。

(4) 今後の課題

① N I E の研究の立場で考えたとき、国語科の視点から見ると、新聞はかなり多くの可能性を含んだ優秀な教材であると言える。しかしながら、それは逆に多くの情報を含みすぎているという意味でもある。子どもが伝え合う中で言葉を見つめ、言葉を豊かに味わう学びを、ささえるためには、教師自身が、言葉を見つめ、その言葉のもつ意味の奥行きに細心の注意を重ねていくことが大切であると考ええる。新聞を使う場合、その情報量の多さから焦点がぶれる可能性もある。子どもが何を求めているのか、教師は何に気づかせたいのか、をよく吟味し、より焦点化した形で児童に提案していきたい。

② 子どもの中に育ちつつある言葉のとらえの深まりを、つまびらかに見つめていくしなやかな指導と評価の一体化した、教師としての自分の有り様の研鑽が必要である。つまりそれは子どもの活動や発言、仕草やつぶやきをよく見ることであり、子どもが何を求めているのか、を見極める力をもつことである。その求めに応じた手だてとしての新聞の扱い方を模索したい。

③ 先に新聞ありきではなく、子どもたちの健やかな学びを支えることができるよう、広がり、深まっていきながら、子どものうちで統合化されていくような、学習展開、課



題の設定、手だてを心がけなければならないだろう。子どもの側に立ち、子どもと同じものを見つつ、一歩先を歩んでその価値を見抜きたい。子どもの先に立ってよく見えているつもりで、初めから目標ありきのごとく子どもを引っ張り誘導することでは、学びは紡げない。あくまでも新聞は子どもの学びの手だての一つという姿勢でいたい。

2. N I E 社会科研究

2009年7月末に開催されるN I E 全国大会・長野大会の社会科前年度研究では、教科学習のねらいを実現するための授業の在り方を探りつつ、新聞をどのように授業に活用していくのか、その価値と具体的な方法を検証した。

(1) 総合的な学習の時間等との横断的な学習单元 (題材)

「3年4組のりんごを育てよう」

(2) 新聞提供に関わった学習経過

活 動 の 流 れ	新聞との関わり
4 月 ○「今年は、自分たちで学校のりんごの木の手世をして、おいしいりんごをどっさり食べないか」と担任から持ちかけた。校長先生に、りんごの先生になっていただくことをお願いしに行く。 ○牛糞運び ・りんごの花のスケッチ 5 月 ○受粉 ・新聞には「摘果をした」って出ていたけど、どんなことをすればいいのですか。校長先生に聞きに行く。 →やり方を教えてもらった子たちが、みんなに伝えた。 ○摘果 ○消毒 1 回目 6 月 ・りんごの実が 11 個落ちていた。全校の人に 4 組が世話をしていることを知ってもらおうと、看板を作り、放送での呼びかけ。 看板：「3年4組が世話をしています」「見るだけにしてね」 7 月 ○袋かけ ○消毒 2 回目 (校長先生) 9 月 ・新聞に「葉摘み」の仕事が出ていましたが、どんなことをすればいいのですか。校長先生に聞きに行く。 →まだ葉っぱから栄養をやっている時なので、やらない方がいいと教えてもらう。 ・30 日 3 年生の社会見学 共和園芸農業協同組合の見学 りんごには、いろいろな名前があり、味も見た目の違いを知る。	りんごに関係する新聞記事を見つけたら、学校に持ってきてくれるよう、家庭にも子どもにもお願いした。 個人で集めてきた記事を教室に掲示していった。(通年) りんごに関する記事や情報を持ってきてくれた時は、その都度子どもたちに紹介してきた。

10 月

- ・ 図画工作「りんごの木と遊ぼう」造形遊び（剪定した枝で）
- ・ 図画工作「思い出のりんごの木を描こう」

○袋とり

○模様のシール貼り

○葉摘み

- ・ 鳥につつかれているりんごを発見。4 個収穫。

○りんごを、鳥から守る方法を考えよう。

○りんごの収穫、試食する。

- ・ 「浅川の一番上まで行ってみよう」遠足

北郷のりんご畑の中を通る。学校のりんごの木や実との違いに驚く。「すごくいっぱい実っていて、うらやましい。色も真っ赤だった。葉っぱが元気いっぱいだった。」

→りんご作りのプロの人たちは、僕たちと、育て方が違うのかな？

新聞の記事の中のりんごの名前にも興味が出てきた。

3 学年社会科「人々の仕事と私たちの暮らし」

単元名「りんごをつくる仕事」

○りんご作りのプロに聞いてみよう！

- ・ 北郷は、帰りのバスがない。電車で行ける中島農園へ行こう。

11 月

○ 13 日 中島農園（須坂市）の見学

自分たちのリンゴづくりと、プロである農家の中島さんのリンゴづくりとの違いを見つけようと、社会見学に出かけた。受粉

- ・ 摘果・袋かけ・葉摘み・消毒といった作業についての質問

や、紅葉・木の元気さ・味・色づきといった質問を中島さんにすることができた。

○見学のふりかえり

- ・ 機械についてや、摘果の作業などについて、自分たちのりんご作りとの比較をする。来年、自分たちがりんご作りをするとしたら、どうするか意見を出し合った。

- ・ 自分たちがやってきたことと、中島さんのりんご作りの比較表づくりと、発表会の実施。中島さんとの比較において、自分たちが実際に体験しているだけに、プロの仕事の工夫や、一本一本に応じて世話することに気づいたようだ。

○色と味をバランス良く作る中島さんにせまる。

今まで集めてきた新聞記事やいろいろな所からの情報を、「りんご情報コーナー」として掲示。



- ・袋かけの作業をから、味とともに色づきも大切なことに目を向けていく。

12月2日（火）

○葉摘みについて

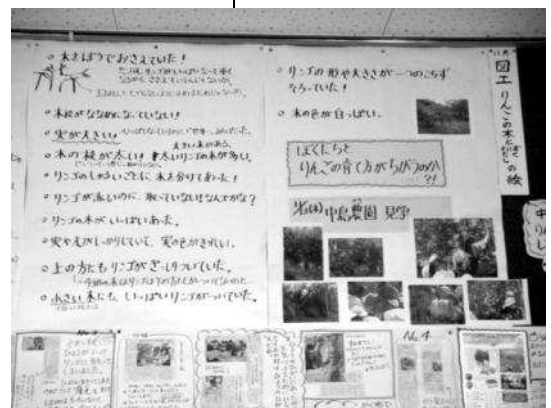
- ・中島さんが、葉摘みをするかしないかについて、それぞれの子どもの捉え方が違っていたので、見学時のビデオを見た。「なかなか手がまわらないが、収穫園から葉摘みをしている。りんご狩りの畑は、最後にやるし、あまりやらない。」ということと、葉摘みは、りんごに、赤い色をつけるための作業であると確かめた。

●日本農業新聞の新聞記事から、葉摘みは、お手伝いをしてもらうくらいに、大変な作業であることを知った。



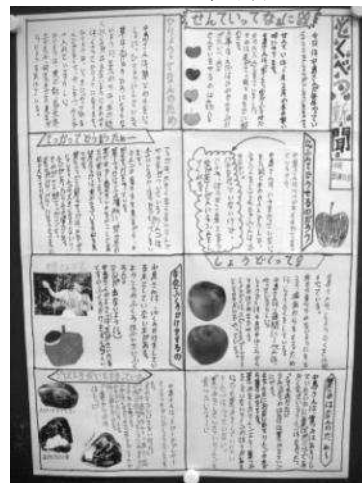
- ・葉摘みしてないりんごと葉摘みしたりんごを見比べたり食べ比べたりしながら、葉摘みしなくても、ほとんどいと糖度が増すという事実を知る。

- ・味にもほとんど影響のない、大変な葉摘みの作業を、どうして中島さんや農家の人たちは、やっているのかを考えながら、葉摘みに対する農家の方たちの工夫や思い、考え方を、ビデオを通して確かめる。



- 単元のまとめとして、中島さんに自分たちが勉強した事について、お手紙を書こう。

- 中島さんのりんごをつくる仕事について、工夫しているなあ、すごいなあ、さすがプロだなあと思ったことを、新聞にまとめよう。新聞の書き方を、NIEの冊子を参考に書いた



(3) 研究成果

○紙幅の関係で、研究過程については割愛するが、N I E 社会科学研究における基礎研究や実践例を積み上げた。それらから、以下のことが導き出された。

- ・新聞活用学習の目的要素（活用における手がかり）が、およそ3点であることがわかった。（－ NIE実践の手引き より ～ 信毎読者センタ－） 「親しむ」ことを基礎としながらその先にある学習効果をまとめたものが以下の表である。

新聞 に 親 し む	新聞に 親しみが 持てる 活動を 仕組む。	① 新聞を学ぶ	新聞（製作過程と新聞社の仕事）そのものを学び、新聞が持つ「価値や機能・役割等」を学ぶために活用する。
		② 新聞に学ぶ	文章力・表現力・読解力・まとめる力を養うために活用する。発信することも含め、新聞づくりもこれにあてはまる。
		③ 新聞で学ぶ	学習のねらいの達成に迫るために、適切な記事を資料化（教材化）して、「学習の手だて」として活用する。

○「新聞を書く」に着目すると、とかく見学等を中心に調べたことを整理してまとめるという学習が多いと思われる。そこから、「取材－記事づくり」の過程において、新聞記者は、自らの視点と考えを盛り込んで記事にしている点に習っていく学習の深まりも構想できる。「3年4組のりんごを育てよう」の実践においては、「自分たちの体験と中島さんとの関わりとを照らし合わせながら、農家の努力や工夫について考えを深めたことで、単元のまとめの「自分たちの心に残ったことを、人に伝えよう」という相手意識を持った新聞作りを実現することができた。その記事内容は、調べたことなどの事実以外に、自分が得た実感や認識が盛り込まれていたからである。「新聞を書く」という点だけでも、その書き方に習うだけでなく、その記事内容の深まりが期待できる学習展開を仕組んでいくことが、社会科学学習におけるN I E教育であろうと考える。

(4) 21年度全国大会長野大会に向けて

- 3つの目的要素（「新聞を学ぶ」「新聞に学ぶ」「新聞で学ぶ」）から、いずれかにあてはまる授業を構想していく。また、どんな学習展開が可能であるのか実践を広げていく段階であるため、一つ一つの実践に学んでいく、実践研究の中で、授業を構想する。
- 教材化及び教具（資料）の素材として、新聞の持つ良さに着目することを大切に考えていきたい。また、そこに潜む大きな課題を、紐解くヒントを求めるとともに、N I E関係者の指導を求めている。

『新聞活用の良さ』

- ①（教科書等に比べ）「幅広い」「新しい」「地域性の高さがある」といった利点を活かす。
- ②メディアリテラシー能力・評価しながら読む能力の育成も含め、「情報の見方」を子どもたちに学ばせたい。情報を鵜呑みにせず、「本当にそうなのか？」という判断をしていける力を育みたい。（クリティカルリーディング＝自分の知識・経験と「関連づけて建設的に批判したりする読み」）